

食糧増産の先覚者 澤村勝爲と三森治右衛門

―草野村役場三森氏の資料による―
鈴木光四郎

愛谷江筋の恩人 三森治右衛門光豊

平市三森氏所蔵の資料を整理してその主なるものを紹介することにした。澤村勝爲の功績は石城の人々に多く知られてゐるが三森治右衛門の愛谷江筋の事業は小川江筋の事と比較して劣ることのない功績があるにも拘らず割合によく知られてゐないので私は専ら愛谷江筋を調査し紹介する次第である。三森氏資料は三森氏三代光隆、元和八年(紀元二二八二年)平城主鳥居忠政封を羽州

三井五郎醫師博士に 日本醫大の教授會議をパス

平市田町に内科開業中の三井五郎氏は戦争中の昭和十七年日本醫大に學位論文を提出その後教室の職災などから審査がおくれたところ、去る十一日の教授會議を通じて醫學博士の學位を贈られることになった。正論文は「副腎皮質ホルモンの腫瘍細胞の關係」副論文「肺腫瘍と肺結核の相互關係」に就いての二件である。新たに學位を贈られる三井氏は、三井榮一氏の末弟で日本醫大で研究を積み、論文を提出した翌十八年春歸郷して開業今日に至つてゐるが、本年四十一才の新進醫博である。

決勝戦は 双葉同志

同業福地民報主催、新制中學對抗野球大會通過り福地大會は十七日平市、平商兩球場で行つたが、市代表はいづれも敗退、双葉同志の浪江、双葉の兩中學が勝ち残つたが、決勝は雨のため行はず追つて日時を定めて行ふ決定。

浪江第一 2-1 平市
植 田 2-1 赤 井
双 中 0-2 警 中

打ちには光隆、内藤右郎左衛門の依頼ありとも云へり承應元年(慶安五年)に當る(二月内藤家の家臣澤村勘兵衛なる者殿の命により先づ小川川用堀を起す。光隆及び長子治右衛門光豊共に之に與かる。當時既に光豊をして内藤家に奉仕せしむ。故を以て命ありしものなり。即ち承應元年二月十五日を以て起工し光隆光豊晝夜衣を脱がず東西に奔走す。而して工事稍々成らんとして勝爲は御沙汰に上り罪を得て明應元年(家網時代)七月十四日大館西學寺に於て切腹申付けられ死す御年四十なり。勝爲小川川を起せられてより僅かに三年三月とす。

意外の收穫

平營林署主催の松茸狩り 加記
秋漸く融となり恒例の平營林立の中に突入した。一行に參署主催の「松茸狩り」が大勢加し記者も幼き頃頭通會で村日岩地内國有林に於て約百餘畝取りに駆け出す時すつくり名を招待十七日催された、此のわくわくする胸をおさへながら約百五十町歩に亘り森から突き進み、恐ろしく怖いので大いに探るべしと云ふ。小池署長さんの説明があつた。一行三班に分れ地元各人のも發見が出来たら早速の朝米案内で一齊に紅葉し初めた木だ、神上山の幸を與へ給へ

怒

海外からの引揚者浦原良二が買つてやりたかつた。良二はある古着屋の店先で一枚のショールを手に放心したもののよきに、そのさぐらの修めな姿を思ひだしてめた。高價な値札を見れば買つただけの餘裕もなかつた、といつて勿論それを捻ぢる氣はなかつたのである。ただ知らず知らずのうちに、そのショールを自分の奥着にしようとしてゐた。古着屋の親爺が泥棒と大聲で怒鳴つた。思はずかつたなつて、その親爺を睨りつけ逃げようとして、遂にその親爺を倒してしまつた。

激

一人の純真な青年の苦惱を通じて運命の冷徹と、ホノノと心をうつ人間愛を描いた松竹作品

配 役
重藤 明 藤井 貢
浦原 良二 宇佐美 淳
妻三枝 月丘 千秋
保科 浩 佐伯 秀男
妹 三枝 草島 隆子
妹 照子 楠 かほる